
ヤンデロイド

ていく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンデロイド

【コード】

N2563BA

【作者名】

ていく

【あらすじ】

病弱な主人公。彼には恋人がいる……………。

窓からは青い空と白い雲が見える。いつになく遠く遠くにあるのは
気のせいか、炎天下の夏特有の景色だ。

それでいて、部屋は尋常じゃなく涼しい。クーラーはガンガンにか
けてあり、若干冷えてお腹痛い。

そして、白い。

真っ白な天井、真っ白な壁、ベッドとベッドを分ける黄色いカーテ
ン。病室だ。

ただ、一つ。

カーテンに着いた赤いシミが…。

彼は病弱な体で、一年に一回は入院をする、という生活を繰り返して
いた。

いつの間にか病院では、VIPの扱いを受け、毎年のように大きな
一人部屋を貰えるようになった。

ぜんぜん嬉しくは無かったし、もっと友達とゲームしたり野球した
りして遊びたかった。結局は叶わない夢だったのだが。

それでも、見舞いに来てくれる友人は多少なりともいる。

「よっ！ハル！」気さくな声で呼ばれる。ハルは僕のアダ名だ。

「ああ……」

「元気ねえな、どうしたよ？あーまさかあの子を思っただけで憂鬱になっ
てたのか？」

「んなつ……」

「大丈夫、呼んであるから。」

「余計なお世話だ……」

この男はシヨウ。イケメンでウザイ。正直ウザイ。

「あ、あの……入ってもいいんでしょうか……?」

リノ。僕の彼女だ。毎日では無いにしろ、いつも見舞いには来てくれるんだ。

「おう、入ってこいよ!」

「何でお前が指図すんだよ」

「は、はあ……失礼します……」

リノはまだこの雰囲気慣れてないみたいだ。正直二人きりでも下を向いて恥ずかしがってる。いい加減顔を見て話をしてほしい。

「で、リノは何を持ってきたんだ!？」

「何でお前がノリノリなんだ」

「おお! スイカじゃねえか! 今年のスイカは個人的に初めてだぜ!

「いや、俺のだから勝手に取るなというか話を聞け」

「ちよっ、ハルくん怖いよ?」

「あ、ああ……ごめん」

「お? イベントシーン!? あ、俺邪魔だったかなあ!」

「うるさい!」

「あ、あれ? スベった?」

そんなこんなで今日も過ぎていく。また明日このベッドの上で起きるんだろう。

二人が帰るとき母さんが呼び止めていた。きつとお礼かなにかならう。俺にはなにも関係ない。さっさと寝よう。

まだカーテンにシミは着いていない。

一週間がたった。

あの次の日から、あいつらは俺の前に現れなくなった。なにかあったんだろうか。

「よ」いつもなら気さくな声も何故か重く聞こえた。しかし今日は来てくれたのだ。結構嬉しい。

「よ。なにやってたんだよ？結構待ってたんだぜ？」

……シヨウは口を開かない。なんなんだ？

「あいな……」急に口を開いては押し黙る。

「お前の、余命、聞いちまった、んだよ……」

「え、……」愕然とした。きつと母親だろうか。余計なお世話だ。

「それから、リノ……壊れちゃった。」

「え？」

「自分の手に入らないものは自分で始末するんだ。って言ってた。きつとお前を殺すって影で言ってる。それでお前が心配だったけど、怖くて言えなくて……」

なんだそれは。

秘密にしていた事がばれて、さらに命を狙われてるというのか？

なんなんだよ！！

恐怖恐怖恐怖恐怖……

体に寒気がほとばしる。

一体どこから狙ってるんだ？何かで打たれて死ぬのか？

怖い怖い怖い……

死にたくない死にたくない。

最後の一瞬までは生きていたい

狂った恋心のために死にたくなんてない！

ベッドから降りふらつく足で逃げようとする。

シヨウは肩を持つとうとして手を握るが、病気で体力の無い彼はすぐに倒れてしまう。なにかがもうすぐ始まる嫌な予感がする。

「ふふふふふ！！」リノだ。

「ふふふふふふふふ！！！！！！！！」

ざあつと血の気が引くのを感じていた。

不気味に笑う彼女の歪んだ笑顔。何か面白いものを見た時の笑いなんかとは違う。歯茎を剥き出しにして嘲笑うかのように転んだ俺を見下して笑っている。

「ハルくんが悪いんだよ？大事な事を黙っているから……ふふふふ……」

いつもの恥ずかしがってる声じゃない。この女の子の本性なんだ、それが。

転んだ俺の頭へ近づき、ふふふ、と愉快そうに笑っては何か繰り返している。シヨウは？居ない。逃げたのか。

「う。ぐっ、」

痛む腹。病気で蝕まれた体は限界に達している。

それでも生きたいと思いつけるから、立ち上がる。

足取りはフラフラ。膝はカクカクと音がなるように震えている。ベッドから降りて気付いたが……俺は歩けないほど弱っている。もう遅いのだが。逃げなくてはならないんだ。この女の前から……

「ぎっ、がああ！」

立つのにこんなに力が必要だったとは。体が重たい。

「はっ、ははっ！立とうとしてるの？ハルくん。ダメだよもうすぐ楽にしてあげるからさあ……あはははは！……」

狂ってる。

正常な思考を失った。

リノはポケットから小さい何かを取り出すと、僕の体に飛び込んできた。抱きつくように。小さい子が母親に抱っこされるように……だ。

「うぐあっ！！あ……！！」

飛び出しナイフ……だ。

胸の中心目掛けて押し込まれたナイフは肋骨に突き刺さっている。

「ぎあつー!!」

口の中から血が飛び出る。肺が殺られたのか？なににせよ呼吸が苦しくなってきた。きつと殺されずともこのまま死ぬだろう。

「あれー？まだ死なないの？おつかしいなあ、心臓狙ったのに」
聞いたことのないくらいに明るい声でしゃべってやがる。

「じゃ、もーいつかい!!」

歪んだ笑顔のまま、もう一度飛び込もうとしてくる。

その歪んだ笑顔のすぐ下。首を目掛けて……

首を締める。強く強く。

「あはははは!!いいよ!!もつと絞めてよ!!」

リノはまだ笑顔のまま。

笑って首を絞められている。

「くっくっく、あはっ!!」

ホントに悲しいときは、笑いしか出てこないのかもしれない。

「あつはッ!!ははははははッ!!」

「ハルくん……」

その歪んだ笑顔が、いつ苦痛に歪んだかは知らない。見えなかった、涙で。見たくもなかった。

「ははははは……あああああッ!!」

涙が止めどなく溢れてくる。自分を殺そうとした殺人犯は、自分の彼女は、もう息をしていない。細い細い絞められた喉の暖かみもだんだん消えていく。

彼は泣きながら、傷一つついていない彼女の顔を撫でる。自分の血が着いていた。慌ててぬぐい去ろう。黄色いカーテンを引っ張り千切ろうとする。しかし彼の力では千切ることも出来な。仕方

がないのでそのままぬぐってやる。
綺麗な彼女の顔は、

ただただ幸せそうに、どこか悲しそうに、笑顔のまま眠っている。

医師が駆けつけた頃には、もう彼の体は死に絶えていた。苦痛に歪んだ笑顔で、死んでいる。

「あのさあ、ここの病院って殺人事件があったんだよ」

「へえ……………興味深い話だね」

「うん。そう思って調べてきたんだ」

「それで？」

「ああ、二人の高校生の男女が殺しあったんだ。女の子はナイフで、男の子は首を締めたんだってさ」

「へえ……………。じゃあねえ、君知ってるかな？」

「うん？なんのことかな？」

「この場所はね、昔から建物が変わったりしているんだけどね」

「ああ、知ってるよ。確か江戸時代はお茶屋、明治では洋風レストラン、昭和以降はホテルで十年前にこの病院ができたんでしょ？」

「君にしては勤勉じゃないか。では、その建物が変わることに

恋人どうしが殺しあっているのを君は知ってるかい？」

(後書き)

彼女がヤンデレだったら。

怖いよねえ……………

こんなに愛されてみたいとはおもっけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2563ba/>

ヤンデロイド

2012年1月6日16時52分発行